

五本松

泉鏡花作

全一章

衾ふすまに入はいつたのは十二時じを聞きいて小半時こはんとき経たつた後あとで、秋あきの夜よは長ながいから、それまでにいる／＼な事ことがあつた。血氣けつきで好奇心かうきしんの熾ひさかな少年せうねんの爲する事ことは、自分じぶんと都合つが五人にんづれで、十一時じ過すぎから天神山てんじんやまを指さして登のぼつたことである。

麓ふもとの町まちに澄渡すみわたつた月つきの下したに、まだ夜店よみせが残のこつて居あた。三角形かくけいの行燈あんどうに、くだものと假名かなを朱しゆでかいた爺ぢいさんの店みせで、少しすこばかり賣残うれのこつた棗なつめと、蒸栗むしぐりとを買かつて、ひえて冷つめたいのを手てに手てに袂たもとに入いれた。袂たもとも重おもいほど、した／＼と降ふるが如ごとき夜露よつゆで、道みちすがら渡わたつた小橋こばしの欄干らんかんも、水みづを打うつたやうであつた。

市まちの者ものが遊山場ゆざんばにするのであるから、坂さかも長ながくはない。又また嶮けはしくもないので、たゞ處々ところ／＼樹立こたちに入はいつて暗くらくなり、森もりを潜くゞつて出でると明あかるくなる月夜つきよの山道やまみちを、いづれも草くさの露つゆに濡ぬるゝ足あしを、重おもくも思おもはず浮う

かれて登る。

天神山と云ふ、其の巔から道を轉じて、愛宕といふのにかゝつて來た。是で臥龍山の半腹を一廻りしたことになる。歸途になると、歩行くのに話の種も途絶えたといふもので、聲を合せて唄をはじめた。

皆で節の揃ふのも多度はないから、おなじ歌ばかり繰返したのにも飽の來たので、後は思ひ／＼に、軍歌、童謡、流行唄、いかさまなぞめきも交つて、人憚らぬ高調子、麓で聞いたら、猪狩の鯨波の聲だと思ふであらう、と然う思つた時、山道の細い坂を一列になつた、眞先に立つて居た自分は、弗と心着いた。

此の愛宕には、五本松と云つて、幾年経るか、老松一株、岳の巔に立つて居るが、根から五本に別れて、梢が丸く繁つて居る。

大屋根に上ると、土蜘蛛の蟠つたやうな根から梢まで、間近にあからさまに見える。其の橋の上から

でも、辻の角からでも、路地の中からでも、櫺子の窓からでも、凡そ全市街の要處々々、此松が見えて、景色を添へない處はない。

石燈籠を置くにも、遠景に此松を控へ、池を造るにも、眺めに此松を添へると云つたやうなもので、其の癖慰みにあしらふべきものではなく、荒御靈の魔神の棲家であることを誰も知らないものはない。尤も幹の周圍には注連を飾つて、傍に山伏の居る古寺が一宇ある。此の神木に對し、少しでも侮蔑を加へたものは、立處に其の罰を蒙るといふ、奇しく怪しき物語は、口碑に傳つて數ふるに勝へないが、其より、疑ひもなく去年の秋。――

塗師屋の職人に源といふ俠氣が在つて、大口を利く、豪傑がある、人を人とも思はぬのだから、神佛も何もない。其癖、春秋の社日の夜參詣、蓮如忌の山遊びなどは、缺した事がないのに、曰く、俺様にかゝつちや、天狗も馬の糞も何もねえと、汚口を叩いて禰次郎兵衛のやうな太平樂。魔は夜中に騒しいのを嫌ふてえから、一番愛宕山を呼崩してくれべい、

皆來ねえ、屁放りの弱蟲め、那樣了簡だから一人で
寐るのだ、と罵つて、無理強ひに連中を募つた。こ
れが五人、件の源さんが眞先に立つて、同じく天神
山から鳴り下つて、愛宕へ懸つたのは丁ど丑の刻。

路が恚く狭いのであるから、其時も一列になつて
下りて來たが、旋て五本松を通り過ぎ、麓の灯が足
の下に見えた時、様あ見る、何うだ、魔なんざ身も
んだえも羽ばたきも出來るもんぢやあるめえがの、
それ、と言つて隊長傲然と振返ると、恚は如何に、
誰も見えない。――今まで背後に附着いて來た
のが、四人とも影も形もなく、源、唯一人になつて
居たから、あツと思つた切。

手にも取られず、目にも見えないが、唯其の疾さ
は、鳶が羽を伸ばした時ほどの、ものゝ氣勢に追懸
けられる。其の可恐しさに、丘とも謂はず、峩とも
謂はず、狂ひ／＼逃げ廻つたが、前後不覺の間にも、
あはれ、足疾鬼も従ふべからざる自轉車のはやりは
じめの頃に乗つたら、其の追ふ者から遁れて、人間
界に歸る事が出來るだらう、と思ひ詰めて居たと、

半年ばかり経て源が本氣になつてから、前の世の事であつたやうに思ひ出して語つた。

其時の後の四人は、奈何して又源が目から消えたといふのに、一番最後の殿で歩いて居た一人が、五本松の下でふつりと鼻緒を切つたので、おや、と言つて立停ると、何だ、何だ、といふので、前に立つた三人言合せたやうに氣を揃へて、其のおや、の何なるかを怪んで立停つた、此の咄嗟の間に、源は何にも知らないで、平氣で歩行いたから、少し離れて振返つた時は、後の四人が立停つた時だつたのである。

四人は源を見失つて、ついたゞ先へ歸つたものばかり、別に怪まないで麓に下り、別れ／＼に歸つて寝た。夜中に源が家から尋ねて來たので、はじめて行方の知れないのに氣が付いて、それから騒ぎ出したといふ。

心からでもあらう、然し夜も同じ時も同じ時、然も、言合せたやうな五人連、自分は眞先に立つて居たから、異常はなくとも、あまり此處で騒ぐのはよ

くないと、弗と心に然う浮んだ。

譯を言つて、唄ふのを止めさせよう、と思つたけれども、中には殊の外臆病なのがあつて、厭だといふのを、是も些と無理強ひに、負け惜みを出させて連れて來たので、自分と今一人、高山といふ、是は殿を打つて居た。二人は可いが、愁つかな事言出して、此の山の中で、神經でも起されてはと思つて、わざと言はずじまひ。其儘自分だけは聲を呑んだが、外連は、こらしよの、こらさ、こら／＼と好元氣で、草木や山の香が骨まで透る夜氣にもめげず、麓へ下りたので、自分は吻といふ息を吐いた。

家に近い四辻で、月明に濡れた黒い姿で、横を向き、後になり、斜に立ち、手を擧げて、放れ／＼に別れて歸つた。

自分で戸締をして、二階へ上つて衾を引被いだが、烈しい夜露に浸された所爲であらう、體は凡て濡紙で巻かれたやうで、而して胸も背も冷たかつた。

暗い木立の中を通す、一條の月の光の明い中を、
山を貫いて歩行いて來た景色などを思ひ浮めながら、
疲れてうと／＼したと思ふと、瓦斯に犯されるやう
な心持、唇がはしやいで、頭が赫々と逆上るので、
うつとりしながら目を擦つて起上る。

枕元に置いた金の火鉢に、寝るのだから埋んで置
いた、ごつ／＼した大きな炭が、不殘眞赤になつて
烈々となつて燃える。

顔を向けると咽せさうなのに、再び搔寄せて灰を
浴せて、そのまゝ仰向けになつたが、其時から目が
冴えた、枕にした愛宕の山嵐は、五本松を潛つて襲
ふが如く身に浸みる。

ひつそりして物音もしない時、颯とばかりに戸外
を駈けて行くものゝ氣勢がある。其とも思ひ料らず、
ふと考へた、其の疾さは丁ど犬が全速力を籠めて四
足で駈けるほどで、而して唯脚ばかりではない、凡
そ鳶が伸しだばかりの翼を備へた物であらうと思ひ
取つた、更にその駈けて行つたのを、地を行くでも

なく、又宙を飛ぶでもなく、着かず放れず其の翼の尖、脚の裏がかすかに地に着いたほど、地の上一寸の處を矢の如くに過り去つたかのやうである。ものゝ音はたゞ一瞬間であつたが、其の氣勢は脈々として長く、耳に残つて消え失せない。

自分は其の形跡を窺はうと思つて、衾から離れて出て、障子を開けて兩戸に手をかけたが、少し猶豫つた。

月明りは板戸の隙から一筋入つて、灯を後にした寢衣の襟へさす、此の明るさでは、蟲も見えよう、今戸を開けて、戸外に甚麽ものを見ようも知れぬ、と殆ど想像し得られない怪しい形を心に描いて逡巡したのである。

けれども、思切つて一枚開けた、板戸一枚がたりと入つた、戸袋へ、どむと手頃な石塊を打當てた音がした。

目を瞑つて坐つたが、及腰に戸外を透すと、誰も

居ない、向の屋根と其の隣の藏があるばかり、何にもない、眞晝のやうな月夜である。

もの音の通り去つた、西の方なる町の果には、白々と霧がかゝつて居た。

落着いて、竊と静に又雨戸を閉めて、障子には氣が付かず、閉めると旋て、つか／＼と引返して、倒れるやうに衾に入つて、襟を顔の半ばに引掛けて、静として居た。

木太刀を打合ふ音、駈違ひ入亂るゝ數百人の聲音、一しきり止むと、女のひい／＼泣く聲がする。又太刀の音、足の音、一しきり止む、と又泣聲がする。手に取るやうに聞える。が間近ではない。町を一つ隔てた山の麓の通りから、曩渡つた橋の上へかけて、推しつ返しつ、恰も軍が始つたやうであつた、其の不思議よりも、寧ろ是を聞いて居た自分を怪まねばならぬ。

凡そ此の修羅の消息は、絶えず一二時間も續いた

らう。果は聞き馴れて敢て耳を敬ず、氣も遠くなつてうと／＼すると、何といふ先觸はなしに、唯彼の高山といふのが血だらけになつて戸を敲いて来る、手も足も血塗になつて来るから、戸を開けて入れてやらねばならない、と然う思ひ／＼、うつとりとなつて寝たものらしい。

起きると、我ながら慌しくなつて驅けて家を出て、然まで遠方ではなかつた其人の下宿を尋ねた。

いつもの寢坊が早起もをかしいのに、机の前に、寢衣の儘茫乎ともお思をして坐つて居たが、顔を見ると突然自分の名を呼んで、昨夕は何事もなかつたか、と言つた。

渠もよく寢付かれなかつたので、――これは礫も打たれず、怪禽の地を駈けるのも知らなかつたが、修羅の消息は同じやうに聞いたのである。

而して恐ろしい様な顔をして見せた。兩手とも赤いものに浸されて居た。顔を洗はうとして弗と氣が

注いたと言つた。掌と甲は落したが、まだ洗ひ残した指と指との間は、十本とも斑に黒ずんだ色の赤いものに塗れて居たので、赤インキでもない、朱でもない、魚の腸の色でもないが、血ぢやあるまい、けれども顔を見合せた時は、心々に頷いた。

窓を開ければ五本松の梢が、向の物干しの陰からほつきりと見えるのだけれど、何か憚る處があつて、其二三日は垂籠めて居た、其だけで無事であつた。

【完】